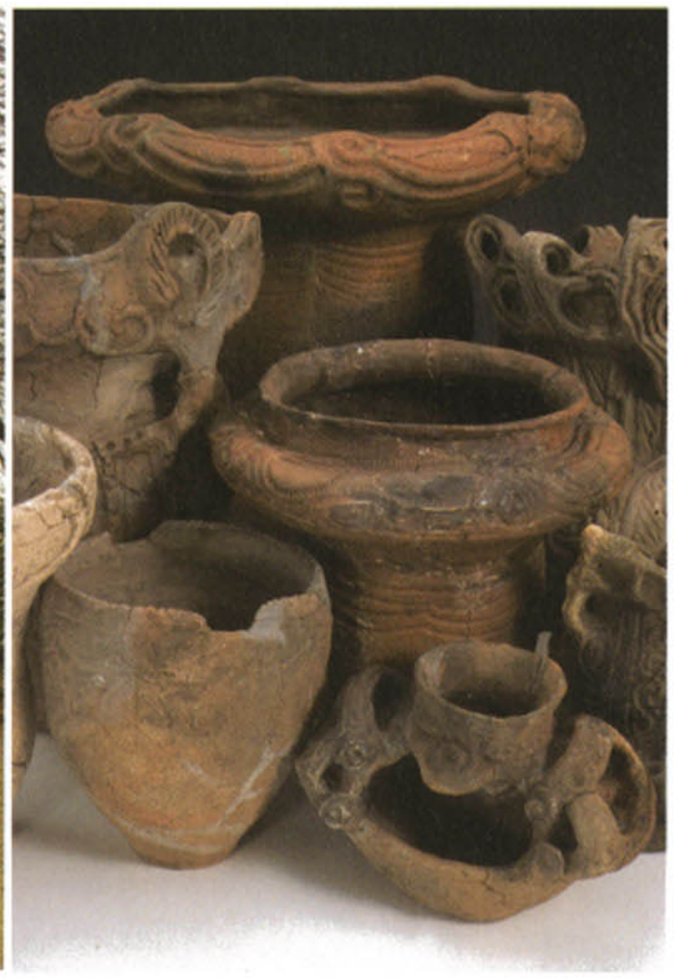
炉畑（ろばた）遺跡（A・B地区）

編集　各務原市埋蔵文化財調査センター
発行　各務原市教育委員会
ＴＥＬ(058)383-1123
平成18年3月　平成21年2月増刷

公園内に復元された竪穴住居



出土した縄文土器

1．炉畑遺跡の概要

炉畑遺跡は、岐阜県各務原（かかみがはら）市鵜沼（うぬま）三ツ池町に所在する縄文時代中期後半と晩期に形成された集落遺跡です。地形的に見ると、各務原台地のほぼ中央部に位置しています。この遺跡は、昭和42年度に実施された土地改良の前後に、多くの縄文土器が出土したことにより発見されました。そして、各務野のルーツを研究するための重要な遺跡として、昭和43～46年度の間に、計５回の発掘調査が実施され大きな成果を収めました。この時の調査地区をＡ地区と呼んでいます。

炉畑遺跡の一部は、Ａ地区調査の後に保存されて岐阜県史跡となり、出土した土器や石器は県重要文化財に指定されました。そして、復元住居を備えた公園に整備されたことで、炉畑遺跡公園として広く知られるところとなり、市内外の多くの見学者に親しまれています。また、考古学研究者の間では東海地方西部を代表する縄文遺跡として高い評価を得ています。

Ａ地区の発掘調査から30年以上を経た平成14年度、遺跡公園の拡張リニューアル工事が計画されたことから、Ａ地区に北接するＢ地区の範囲確認調査を実施しました。この調査は、炉畑遺跡の広がりや構造を再検討するための重要な機会となりました。

現在の炉畑遺跡公園は、Ｂ地区の調査成果を反映して設計されています。

Ａ地区第５次調査の様子（昭和46年度）

Ｂ地区調査の様子（平成14年度）

炉畑遺跡集落の全体図（緑色部分は公園範囲、茶色部分が発掘した箇所）

2．炉畑遺跡の集落構造

遺構の配列と地形

A・B地区の発掘調査の結果を合わせることで、炉畑集落の全体像が見えてきました。集落の規模は直径 80m 前後で、南端に接する小川を生活水の源として成立した村のようです。竪穴住居（たてあなじゅうきょ）は、南の土地が高い部分に弧状に配列し、北側には掘立柱（ほったてばしら）の倉庫や屋外炉（おくがいろ）、貯蔵穴（ちょぞうけつ）群が展開しているようです。これらの配置状況は、土器型式に見られるように複数の時期に形成されたもので、全てが同時に存在したものではありません。しかし、長期に渡って集落内の場と機能が考慮されていたことが読みとれます。

炉畑遺跡は、全ての範囲が発掘調査されたわけではなく、多くの部分が未発掘で公園の下に埋もれたままとなっています。調査と研究の可能性を残しながら、埋蔵文化財として将来へ保存されていきます。

Ｂ地区発掘調査時の空中写真（平成 12 年度）

炉畑遺跡の遺構

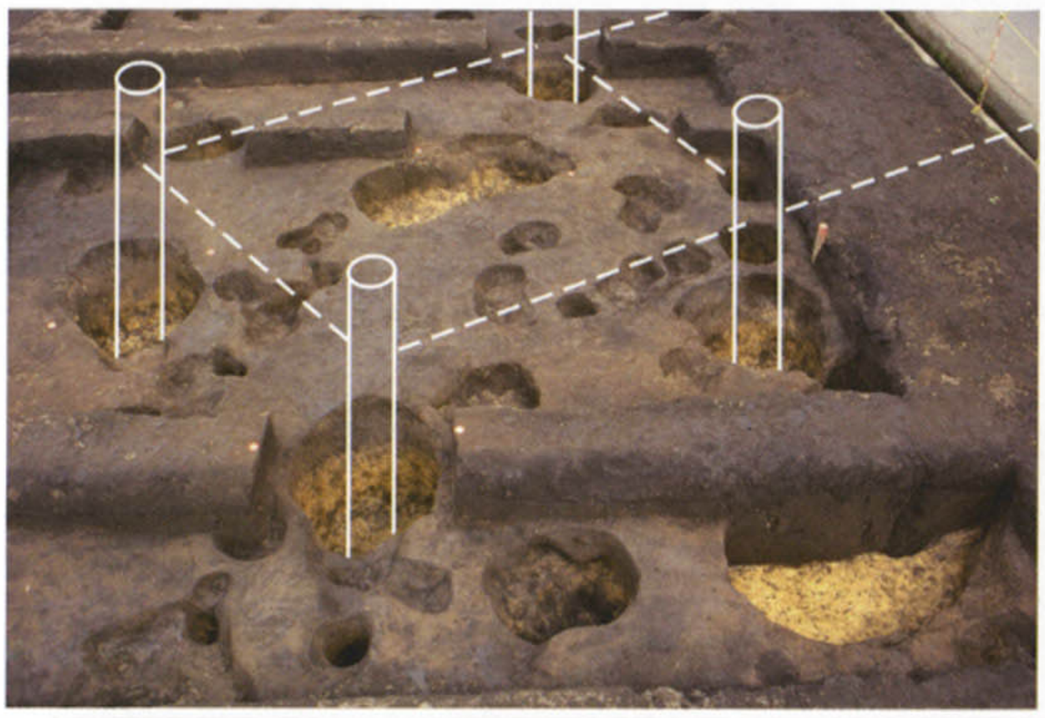
これまでの発掘調査では、縄文時代中期後半の竪穴住居跡10基、堀立柱建物跡1基、屋外炉跡1基、複数の貯蔵穴群、そして晩期の土器棺墓5基などが検出されました。未発掘の部分にも、同種の遺構が多く埋没していると思われます。

<第1号住居跡内の土器出土状況>　竪穴住居の中から出土する土器は、その住居で使われていたものとは限りません。人が住まなくなり大きな窪地となった廃屋には、土器が周囲から廃棄されます。写真は、炉畑（咲畑）式土器です。

<第9号住居跡>　床を掘り下げて、周りに細い溝を廻らせた竪穴住居です。一辺5～6mの四角形をしています。中央に石囲い炉を備えていますが、炉石は一部を残し抜き取られていました。柱を支えていた柱穴も確認されています。

<土器棺墓>　日常で使用する土器を、埋葬用の棺として再使用したものです。大人の体は入らないので、一度土葬をした後に骨を拾い集めて土器棺に再葬したという説や、胎児や乳幼児の棺とする説などがあります。

<貯蔵穴群>　多くの穴が、同じ範囲に何度も掘り直されています。深さ80cm以上の穴もあります。炭化したドングリの実なども含まれていました。穴の下方には粘土がありますので、粘土採掘をした穴とも考えられます。



<堀立柱建物跡>　床を竪穴としない建物で、柱によって床板を上げ高床式にした倉庫などと考えられます。4本の柱穴が確認されましたが、実際には6本の可能性があります。柱間隔は3.3m前後で、白線は柱のイメージです。

<屋外炉跡>　構造的には、竪穴住居の内部にある炉と同じです。川原石を割って組み合わせ、直径は約60cmです。村の広場の共同作業場に設置されたものと思われます。内部の熱で赤く焼けた状態が、そのまま残っていました。

炉畑遺跡から出土した縄文土器を型式順に並べてみました。

時代	時期	類似する土器型式
縄文時代	中期	船元Ⅲ式（ふなもと）
		里木Ⅱ式（さとぎ）
		炉畑式（咲畑式（さきばた））
		神明式（しんめい）
		取組式（とりくみ）
約4,000年前		
	後期	
約3,000年前		
	晩期	
弥生時代		樫王式（かしおう）
紀元前4世紀頃※		
	前期	

1

2

3

4

5

6

7

8

9

10

11

12

13

14

15

16

17

18

19

20

※弥生時代の開始年代は、さらに500年程さかのぼるかもしれないという説があります。

3．炉畑遺跡の縄文土器

土器型式とは

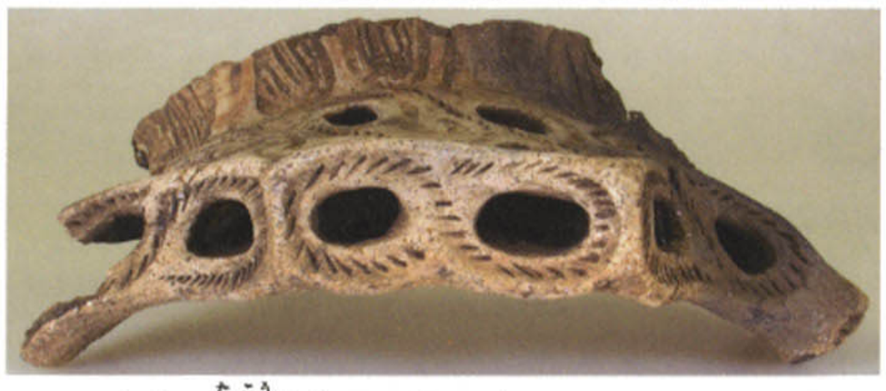
縄文土器は、粘土紐を積み上げる輪積み法により作られたものです。一つ一つが手作りで、全く同じものが複数作られることはありませんでした。ところが、各々の土器をよく観察すると、似ている土器と似ていない土器を区別することができます。縄文土器は、土器の製作者が好き勝手に作ったのではなく、同じ村や、つながりの深い地域集団のルールに基づいて作られました。そのルールの広がりと内容は、時代の流れによって変化していきます。そうした背景を考えて区別できる土器のまとまりを土器型式と呼んでいます。したがって、土器型式には地域差と新旧の時代差が表れていることになります。

立体装飾の把手（土器 14）

ワラビ状文や刺突文（土器 10）

連鎖された渦巻文（土器５の上部）

大柄の唐草文と縄文（土器７）



中空の多口装飾（土器 15 を上から見たところ）

炉畑遺跡の縄文土器型式

炉畑遺跡で確認されている縄文土器を、今日の考古学で研究されている土器型式に当てはめると、６型式が代表的なものとなります。縄文時代中期後半のものに集中しており、この時期が、炉畑遺跡が最も栄えた頃と言えます。これら中期の土器型式は、完全な新旧関係にあるのではなく、一部が同時に存在しながら複雑に変化しているようです。中期以降には、晩期の樫王式土器が見られますが、弥生時代が始まろうとする頃に、もう一度、炉畑遺跡において人の営みがあったということになります。

炉畑式土器（咲畑式土器）

中期の土器型式のうち、炉畑式土器と命名されたものがあります。この土器は、愛知県の知多半島にある咲畑貝塚で最初に発見されたため、咲畑式という名称の方が一般的です。しかし、その後の発掘例の増加により、各務原台地や美濃加茂市の木曽川中流域を中心に栄えた土器型式であることが分かってきました。炉畑遺跡のシンボル的な土器だと思われます。

4．炉畑遺跡の祈り

装飾品・呪術具

出土した遺物のなかには、特別な目的で作られたと考えられる道具があります。

<耳栓>　現代のものに例えるとピアスのことになりますが、径が 1.7 cmと太いものです。呪いをする女性が身に着けたと思われます。

<玉>　硬い石に穴が開けられています。ペンダントのように紐を通して使ったのでしょう。数が少ないことから、特別な人が身につけたのではないでしょうか。

<土偶>　女性を抽象的に表現した土の偶像です。子供の安産や多産を祈る時、病人を救いたい時の身代わりなどとして使用されたようです。

耳栓等

玉

土偶

5．炉畑遺跡の石器

石器の種類と用途

炉畑遺跡の発掘調査では、土器のほかに石器も多く出土しました。

縄文時代には、まだ金属器がありませんでしたので、硬い性質を必要とする道具には、主に石が用いられました。今、私たちが知っている道具には、既に縄文時代から使われていたものがあります。

＜狩猟具＞ 石鏃は、矢の先端に取り付けて、弓で放って中小動物を射止める利器です。

＜漁労具＞ 石錘は、炉畑遺跡など中期後半の遺跡から特に多く出土します。魚を捕る網の錘に使用されたとするのが定説ですが、布を織るときなどの錘として使用された可能性もあります。

＜工具＞ 打製石斧は、土を掘るための鍬として使われました。また、自生した芋などの根菜類を掘り起こす時などにも使われたでしょう。磨製石斧は、木を伐採する時に使われました。斧には強い力が加わるため、先が折れてしまっているものが多く見られます。小型のものは、ノミとして使われたようです。石匙は、万能ナイフとして使われました。釣針形石器は、形は釣針に似ていますが、用途は石匙と同じであったと思われます。石錐は、今で言うドリルの刃先のことです。

＜調理具＞ 石皿と磨石は、セットで使用されました。ドングリの殻を割ったり実を磨り潰したり、他の食材と練り合わせるなど、料理のための作業を行う俎板のような石器です。

石鏃（左から順にチャート、下呂石、黒曜石の石材）

釣針形石器
石錐（右の３点）

打製石斧と装着復元

磨製石斧と装着復元（白色蛇紋岩ほか）

石匙と装着復元（木の柄と紐の２例）

石錘と装着例

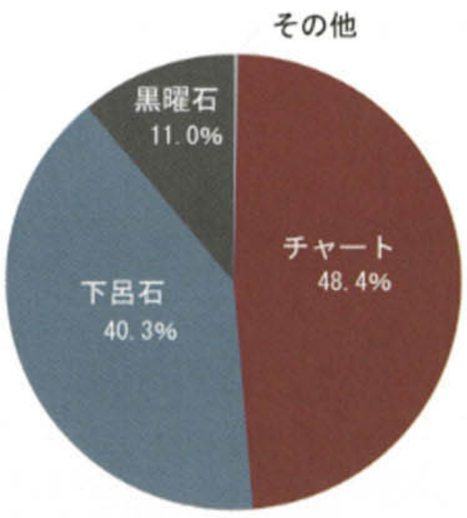
磨石と石皿

6．その他の分析結果

^{14}C年代測定（炉畑遺跡の年代）

炉畑遺跡からは、炭化したドングリの実が出土しました。炭になっているため、何千年を経ても形が残ります。そうした炭化物を化学的に分析すると、その物体が炭になった時の年代を測ることができます。炉畑遺跡の炭化物の測定により、4,125年前～4,375年前（1,950年を起点として）というデータが得られました。

B地区の貯蔵穴から出土した炭化ドングリ



石鏃などの石器材料比率グラフ

石器石材の入手先

炉畑遺跡で使用された石器には、色々な石材が用いられています。石鏃や石錐などの鋭利な石器石材には、ガラス質のチャート、下呂石、黒曜石が多く見られます。チャートは在地の石材で、下呂石は下呂で産出される流紋岩の一種です。下呂石は、飛騨川から木曽川をたどって下流へ移動していますので、付近の川原で小型の原石を採集することができます。黒曜石は、長野県和田峠周辺のもので、遠隔地との交易によって運び込まれたものでしょう。その他に注目される石材は、磨製石斧に用いられた白色の蛇紋岩で、こちらは飛騨地方や北陸地方からもたらされた石材と考えられます。